



台風が通り過ぎて秋の気配がただよいはじめた朝、大連に住むある老人から暑中見舞の航空便を受けとった。消印は八月一日になっている。受けとったのが二十九日だから、大連からほとんどひと月かかったことになる。その前にレニングラードの友人から来た航空便は十七日目に到着した。ずいぶんかかるものだと思つたが、大連からにくらべると、まだ早かつたわけだった。

老人には七年前の夏、大連で会つた。暑い陽盛りの午後、話めえり服のボタンをはずしもせずに私と向い合つた彼は、全く日本語を知らないように見えた。そのうちに、何かのきっかけで、彼と私が同じ中学の出身であることがわかると、急に立ち上つて上衣をぬぎ改めて握手をして、それから少しもよどみのない日本語で、夜のふけるまで語りつづけた。老人は京都の吉田に住んで医学を修め、そのときも今も大連病院の医長をつとめている。生きている間にもう一度京都を訪ねたいというのが老人の切なる願ひだった。帰国後この話を中学同窓の先輩や友人たちに報告すると、何人かの人たちが熱心に奔走した。中国の訪日医学使節団に加えてもらうように骨を折つた人もいた。しかし、老人の願ひはまだかなえられていない。

この間、朝鮮の人の来訪を受けて面会した。祖国往來の自由を要

求する運動に助力してもらいたいというのが来訪の趣旨だった。北鮮の人たちは、帰国することはできるが、一旦帰つてしまうと、もう日本に来ることはできない。在日朝鮮人は日本に住みついで、日本に生活の根柢を持ち、家族を持っている人が多い。日本を離れては生活の見とおしが立たない。したがつて、帰国したきりになつてしまふわけにはいかないが、年老いた父母に会い、墓参もしたいし、祖国がどのように変つていくか見たいと願っている人は多い。それができないのは人道問題ではないかというのである。聴いていると、胸の痛くなるような話もあった。

このことについては、日本各地の県市町村議会などで、数十に上る支持決議がおこなわれている。しかし、日本の政府は動き出そうとすると気配も見られないのだそうである。

私を訪ねてきた朝鮮の人は、京都で生れ、京都で育つた人だった。その人の話の中に、関東大震災のことがあつた。あのときには、どこからともなく伝えられた朝鮮人の襲撃という流言飛語で、日本人は恐慌状態におちいり、多くの朝鮮人が虐殺された。自警団は朝鮮人と日本人を、日本語の発音で区別しようとした。そのためにつつたまぢがいくも少なくなつた。悪夢のような朝鮮人としては忘れられない、そして、日本人としてははげしいかきりの残酷な事件だった。私を訪ねてきた人は、そのころはまだ幼なかつたのだが、思い出のひとつとして、父親の残した教訓を語つた。「完全な日本語をおぼえるんだよ。日本人と少しも違わないように話すことができるように勉強するんだよ。」と、彼の父は、くどいほどいつてきかされたさうである。